

見頃は  
5月中旬～6月上旬

**見渡す限りの  
菜の花に癒される**

美しい農村景観で地域の魅力を発信豊かな土壌を育む「滝川型輪作体系」を作ろうと、2000年「たきかわナタネ生産組合」が設立され、菜の花の本格的な栽培が始まり、同時に「たきかわ菜の花まつり」がスタートしました。初夏、あたり一面に黄色の花が咲く様子は、畑の滋養という役割を超え、たちまち多くの人々を魅了しました。



**10万人が訪れるイベントへ成長**

イベント当日を含む1週間を「菜の花ウィーク」としてメイン会場に展望台を設置、イベント当日は「グルメ会場」で滝川の特産品もたっぷり味わえます。「菜の花MAP」で紹介される畑の数は年によって40～50カ所。毎年、異なる風景を楽しめますが、くれぐれもマナーを守った観覧をお願いします。



たきかわ菜の花まつり実行委員会  
<https://www.takikawa-nanohana.com>

えて、好きなものを収穫して購入してもらいます。  
「例えばズッキーニがどれくらい大きな株に、どんなふうに乗っているのか、お客さんが実際に畑で見てビックリしたり、先週買った野菜の感想を聞かせてもらった

もともと「ものづくり」が好きでデザイナーだった二人。対象がファッションから農作物になり、滝川の豊かな自然の中で農作業をするなか



ハウス内にはトマトがたわわに。保護犬のリリーも畑が大好き

「両親が始めたファームステイも恵介さん夫妻が引き継ぎ、研修で訪れる中高生の対応をしたり、東京の友人たちも度々「なかのふあ〜む」を訪れ、自然の中でひとときを過ごしていくそうです。  
今後は、滝川でも増えてきたエゾ鹿の農業被害を防ぐための活動や、エゾ鹿肉や皮革を活用したもののづくりなど、農業を通じた新しい取り組みをさらに続けていきます。



Linksが札幌の百貨店で開催しているマルシェにも参加

**農業を通じて自分たちの  
ライフスタイルを築く**

りすることが、自分たちにとっても楽しみにもなる」と、恵介さん。  
このほかにも、知人の少ない北海道で同世代の女性農業者との交流を持ちたいと思った恵美さんは、「北海道若手女性農業者集団（links）」に参加。農業についての熱い話が多いといい、流通や経営についての情報交換や、札幌などで開催されるマルシェで「なかのふあ〜む」の野菜を販売したりと、活動の幅を広げています。

で、これまでに増して「衣・食・住」の充実を感じているそうです。  
「農業だけに限らず、仕事はキツイことや大変なことがあるのは当たり前。少しでも効率良く仕事ができるよう、家族でよく話し合います。でも、夏の日の農作業の後で、山に沈む夕日を眺めながら、庭先でビールを飲むのは本当に幸せな気分になります」と恵介さん。



古い家屋をリノベーションしたファームコテージでは、ゆったりした田舎暮らしを体感できる



なたね油の商品ラベルは義治さんの版画が元になっている

つことなく自然な方法で搾油し、無添加の自家製なたね油として商品化。さらに、なたね油の搾りかす



母の美規子さんと父の義治さん

今から30年ほど前、父である義治さんは、滝川でかつて栽培されていたなたねの復活を図ろうと作付を始めました。その後、周囲の畑でもなたねが植えられ、栽培面積が広がっていききました。栽培したなたねは、母の美規子さんが自宅敷地内の加工施設で薬品を使

**両親から学んだ  
「つくること」の魅力**



は畑の肥料として活用し、循環型の生産体系も築いてきました。  
また20年前には、菜の花の美しさを多くの人に見てもらおうと義治さんが参加している「たきかわナタネ生産組合」が中心となって「たきかわ菜の花まつり」をスタート。今では、滝川の美しい農村景観を国内外にアピールする大きなイベントとなりました。  
幼い頃から両親のもののづくりパワーを身近に感じながら育った恵介さんには、「ものづくり」の魅力が十分に伝わっていました。

**お客さんが楽しみながら  
自分で収穫する直売所**

農家となって栽培した作物を市場へ出荷するだけでは、実際に手にとつて食べてくれる人の反応が見られず物足りないと感じた恵介さんと恵美さんは、野菜の並ばない直売所「うちの畑」を始めました。  
夏の間、週末限定で自宅の庭にキッチン用のタープを張り、入り口に看板を出したら開店準備完了。お客さんがやってくる畑へ案内し、旬の野菜情報を伝



「うちの畑」開催の目印はこの看板

